

アシスト

市川市サッカー協会第4種委員会 委員長 石原孝幸

新年がスタートしました

2017年。平成29年がスタートしました。皆様いかがお過ごしでしょうか。本年もよろしくお願いたします。正月恒例の市川シャポーカップ親善大会6年生の部も、市川真間どろんこSCとフッチSCの2チームが勝ち残り、フクダ電子アリーナでの決勝戦を残すのみとなりました。今年は3月4日(土)に行われます。どちらのチームも準備を万全にして当日を迎えて下さい。

さて今年は、暮れから正月にかけて比較的天候がよくサッカー日和が続きました。振り返ってみますと、Jリーグチャンピオンシップ、クラブワールドカップ、天皇杯、高校サッカー選手権と、サッカーファンにとっては堪らない約一か月間でしたね。観戦に行かれた方も多いのではないのでしょうか。

今年はやはり鹿島アントラーズの躍進が目を引きました。年間3位からJリーグチャンピオンに勝ち上がり、クラブワールドカップでは「あわや！」というところまで世界王者と競い合い、明けて天皇杯をも制するという活躍ぶりでした。11月23日から1月1日までの40日間で10試合という過密日程の中での偉業ですから、すごいことだと思います、ジーコの時代から鹿島アントラーズに受け継がれていると言われる「常勝の精神」はさらに磨きがかかることでしょう。今年のJリーグは、鹿島アントラーズが中心になっていくかもしれません。

しかし、天皇杯では考えさせられることもありました。それは、「球際の強さ」と「ラフプレー」についてです。

前半18分の場面。鹿島アントラーズのMF小笠原満男選手が、相手に足をひっかけられ、倒れこみました。主審は笛を吹いてプレーを止めましたが、川崎フロンターレMF中村憲剛選手が転がってきたボールを蹴って戻すと、これが倒れこんだ小笠原選手を直撃しました。すると、小笠原選手が激高。ピッチ中央で小競り合いに発展してしまいました。

一発勝負の、意地と意地がぶつかり合う決勝戦にはありがちな光景かもしれません。観ている方も高揚します。しかし、何か残念な気もしました。「こういうのを見たいんじゃない！」

このような小競り合いになるようなファールの前には、伏線となる相手方のファールがあることが多いです。やられたらやり返すという感じで…。このケースも、小笠原選手は18分に倒される前に、明らかに2つのファールを犯しています。一つは前半7分、川崎のFWの選手との1対1の場面で体を当てに行き、左肩を相手の顎にヒットさせています。もう一つは、その直後、

中村憲剛選手がバックパスをしようとしているところを執拗に追いかけて後ろから足を引っかけて倒しています。おそらくこの二つのプレーが伏線でしょう。

サッカーは格闘技の要素もあります。正当なタックルは認められています。「球際」の接触プレーもサッカーの醍醐味なことは確かです。そして、「球際の強さ」が過度になるとファールになってしまうのだと私は理解しています。しかし、伏線となったと思われる二つのプレーは「球際の強さ」とは程遠い、別のものを感じました。

「球際の強さ」を育てること。皆さんはどう指導されていますか？「相手より先にボールに触ること」「体を(相手とボールの間に)入れること」あるいは「相手に蹴らせないこと」等、場面々々で指導されていることと思います。そして球際に強くいった延長線上でファールになってしまうことはある。その時は謝ればよい。けっして怖がってはいけません。私はこんな風に教えています。

球際に強くいった延長線上のファールの他に、所謂「ラフプレー」によるファールがあります。業と相手を引っかけたり、シャツを引っ張ったり、掴んだりすることです。特に相手に抜かれそうな時に多く発生します。

子ども達にこのようなファールをすることを教える指導者はまずいないでしょう。いや、教えてはいけません。なぜかという、相手に抜かれそうな時に、ファールで解決しようとする子を育ててしまうからです。磨くべきは、ファールをすることではなく、守備の個人戦術です。1対1の守備では、相手との間合い、駆け引きから、最後は体を入れてボールを奪い取ることを目指すべきです。その結果ファールを取られてしまうこともあるのですが…。

話を天皇杯に戻します。天皇杯決勝という場。日本サッカーを代表する試合です。あらゆる意味で、最高の質であって欲しい。技術面でも、戦術面でも、闘争心を奮い立たせるにしても、子どもが真似をできるようなものであって欲しい。そうでなければ困ります。

私がいいなと思ったのは、川崎フロンターレの大久保選手のプレーです。彼は、試合開始直後から最前線で相手にプレッシャーをかけ続けていました。時に味方から自分へのパスが大きくずれても、相手に簡単にクリアされないように、まさに蹴ろうとする相手に飛び込んでいました。しかも、相手の体に行くことはありません。相手との無用な接触は無しに、チームのために身を粉にして働く姿。彼の直向きで、果敢なプレーは、味方選手を鼓舞するのに十分なものだったと思います。私は彼のプレーに奮い立たつものを感じました。

さらにもう一つ。いいなと思ったこと。前半18分の小競り合いから、再開となる場面で、中村選手が、小笠原選手に近づき、ゴメンというように小笠原選手の腰の辺りをポンと叩き、遠ざかって行きました。小笠原選手は終始全くの無表情。再開のためにセットされたボールに集中していました。中村選手もボールに集中しながら近づいており、腰の辺りをポンと叩いた時以外は、ボールに集中したままでした。小競り合いの当事者達は、すでに気持ちを切り替えて、次の展開への準備を怠らずにいました。戦う姿勢としても、キャプテンシーとしてもいいなあと感じました。「これで少しは落ち着くだろう。」と思った矢先。直後のルーズボールへの空中戦の競り合いで、鹿島の選手の足が、川崎の選手の首にヒットし、ピッチ上は再び騒然となるのですが…。

委員長通信、復活です！ 長い間お休みをして、申し訳ありませんでした。